

慈雨と言え

玉井江吏香

【登場人物】

有馬　（同級生・元文芸部・地方公務員）
伊東　（同級生・元文芸部・新聞記者、現在静岡在）
漆原　（同級生・元文芸部・地域コミュニティ紙の編集）

●シーン1

雨音。

舞台には背中合わせの3人の女性。それぞれがそれぞれの部屋等にいる。有馬、パソコンの前に先に座つて画面を見ている。手元に原稿のようなものを持っている。伊東・漆原、時間を見たり、用事を済ませたり、飲み物の準備をしたりパソコンの状態や映りを確認したりしながら、時間を見てパソコンのチャットローム（ZOOM的な）に入る。

有馬 あ、

伊東 有馬！

有馬 とうちゃん。おーーー。

伊東 お。うるが、

有馬 うるちゃん、来た、かな。

漆原 おーーー。あ、揃つた？私最後？

有馬 うん。ええつと。

伊東 とりあえず、乾杯しようか。

漆原・有馬 うん。

それぞれ、手にグラスやコップを持つ。

有馬・伊東・漆原、ひさしごりー、とか、げんきー、とか口々に言いながら乾杯する。

漆原 ごめん、私遅かった？

有馬 全然。

伊東 いや私もうるのちょい前だつたし。

有馬 時間通りだつたよ、二人とも。全然。

有馬 元気？

伊東 まあね。

漆原 まあなんとか。有馬は？近いのに、会ってないよねー。

有馬 はいまあ、手堅く。

伊東 おお、地方公務員。

有馬 どうちやん、今、

伊東 静岡支局。

漆原 ガンダム。

伊東 それそれ。

有馬 お茶。みかん。

伊東 そうそう。

漆原 住みやすい？そっち雨どうよ？

伊東 結構降ってるよー、流石に日本中雨じやない？今日は。そもそもここそっちに似てるし。あ、でも新人は2年で転勤するから、来年はまた別の地方局かなー。

漆原 へええ、大変ねー。うちはそういうのないから。

伊東 慣れあつたりしない方が、つてことかなあ、適度な距離を、的な。うるんとこはあれでしょ、地域コミュニティ誌だから、寧ろ、

漆原 どんどん行く感じ。

伊東 つて、うる、何食べてんの？

漆原 たこ焼き。

有馬 私もさつきから手の動き気になつて、

伊東 焼いてんの?たこ。

漆原 焼いてる。

伊東 自由か。

便利なんだつて、ひとりサイズのこの大きさ。今たこ焼きだけど、鉄板にすると一人焼肉とか焼きナスとか出来て。
漆原 ヘーーー。なるほど。

漆原 チジミも。

伊東 まあ確かに。便利かも。

漆原 でしょ。どうちやん、何食べてんの?

伊東 私?コンビニで唐揚げとか、適当に。冷凍枝豆とか。有馬は。

有馬 私、割とちやんと作ったよ。茄子のみそ和えとたたききゅうり。あと肉焼いた。

伊東・漆原 おおーー。

伊東 肉いいね。

漆原 いいね。焼肉食べたい。

有馬 うるちやんのたこ焼きの方が、

漆原 所詮炭水化物。

有馬 や、今出来上がるっていう臨場感が、

伊東 確かに。私も今度やろ。

有馬 私も。

漆原 やつてやつて。

有馬 この間ね、

うん。

有馬 金子先生と岡平先生に会つて。

伊東・漆原 （口々に）金子先生？！岡平先生！

有馬 金子先生、二人目妊娠中で、産休つて言つてた。

漆原 へえーー。そつか、いいな学校の先生つて、ちゃんと産休取れるよね。

伊東 まあ、ああいうところが率先して取ってくれないと、民間が取りにくいくし。

有馬 うん。ほら、私たちの時も、金子先生途中で、

漆原 そうそう。そんで岡ちゃん先生が代わりに担任になつて。あれ二学期くらいだつけ？

伊東 岡平・・・え、もう何歳？元気だった？もう定年、

有馬 来年つて。

伊東 まあそうよね・・・うわ、懐かしい。私は特にほら、岡ちゃん、文芸部の顧問だったから。

漆原 懐かしいなー。私も会いに行つてみようかな、学校に。ちよ、たこ焼きめっちゃ美味しい。美味しくできた。

伊東 おおーー。

有馬 めっちゃ美味しいぞ。うるちやんつて昔から、

漆原 ん？

有馬 そんな感じだったよね。

伊東 うん。自由人。

漆原、たこ焼きを食べる。

有馬

あのね、私、最近よく会うんだ、金子先生と。今年、移動した部署が金子先生の実家の居酒屋の近所で。
伊東
へえ、金子先生んとこ居酒屋なんだ。

有馬
産休中だから、時々店にいるの。

漆原
へえ、行つてみたい。今度誘つてよ。

有馬
うん。

漆原
なんて店？

有馬
はせくら。

伊東
お、意外と高級そう。

有馬
お父さんの旧姓なんだって。

伊東
ああ。金子先生のお父さん、入り婿さんなんだ。

有馬
そうみたい。美味しいよ、そんなに高くないし。

漆原
待つて待つて、岡ちゃん先生、どこに登場するの？

有馬
常連みたいで。

伊東・漆原
ああ。

伊東
うん、それで。

有馬
うん。相変わらずふくふくしてて、

伊東
そうじやなくて、

有馬
うん？

伊東
なにかあつたんでしょ？

● シーン2

有馬

江崎のことなんだけど。

伊東

・・・

漆原

とうちゃん、お墓、行つた?

伊東

・・・そつち、帰つてないから。

漆原

そつか・・・そうだよね。

伊東

うん。

有馬

これ、

と言つて、原稿用紙の束を見るように、

有馬 漆原 本にならないかな?
なに?

有馬 江崎の、原稿。

漆原 え、

有馬 絶筆、つていうの？になると思う。

伊東 ・・・なんで？・・・そんなに仲良かつたつけ？

有馬 いや、なんていうか、

伊東 ・・・

漆原 ・・・

有馬 ・・・えと、

伊東 「梅檀賞作家・江崎雨音、屋上から飛び降り自殺」の謎。

有馬 そんな言い方、

伊東 だつてそうでしよう。

有馬 ・・・

伊東 卒業したら音信不通になつて作家になつて。そしたら次の情報は、ニュースで「死んだ」つて。

漆原 だつて。・・・まあ、江崎は才能があつたから。

伊東 だからよ。

伊東 だから腹が立つ。

漆原 え、

伊東 うるだつて、有馬だつて、みんな分かつてたでしょ？江崎だけが・・・江崎だけに才能があつた。

有馬 そんなことないよ、どうちやんも、うるちやんもすぐかつたよ、あの時期の文芸部は最強だつたなーつて岡平先生もいつもおっしゃつ

てるし。どうちやんは大手新聞記者で、うるちやんだつて地元だけどメディアで今でも書く仕事で、

漆原 や、うちちは零細の地域コミュニティ雑誌だから。

有馬 でも誰でも出来る仕事じやないでしょ。

伊東 中途半端にはあつたから。文才が。

漆原 中途半端言うな。

伊東 「ごめん・・・でも、江崎がいたから。

漆原 ・・・うん、まあ、

伊東 うん。

漆原 分かるけど。

少し間

伊東 「梅檀賞・江崎雨音」って聞いたとき、

有馬・漆原 ・・・

伊東 私ね、身が震えたの。

漆原 ・・・うん。

伊東 もうね、ほんとに。ぶるぶるって、ふるえたの。ああよかつた、あの子には本当に誰にも負けない才能があつたんだ。よかつた、私だけじやない、よかつた・・・

有馬 とうちやん、

伊東 なのに死んで。

漆原 酔つちゃったか。

伊東 自分で、死んで。絶筆の原稿ですってなに。なんのよ、いつまで・・・（少し笑う）いつまで私の情緒を破壊するつもりだーーーって
いうか、ごめん 酔つてる。

漆原 （画面からビールを注ぐジエスチャ―）まあまあ。

伊東 ・・・

漆原 私は、私たちは、かな（有馬を見る）、どっちかだと思つてたよ。もし将来、プロの作家になる人が居るしたら、江崎かどうちやんだ
なつて。

有馬 うるちやんだって、

漆原 私のは、面白いけど、文学ではない。

有馬 ・・・

漆原 文学じゃなくても、書く手段なんて何でもあるしね。

有馬 うん。

漆原 まあ、でも正直、とうちやんの方がストイックっていうか、必死、っていうかごめん、夢中だったよね。江崎は、ほら、家がいちば
ん、だつたから、よく部活さぼってたし。水泳も。

伊東 今日は妹のピアノの練習日とか、お母さんの誕生日とか、

漆原 弟のマット運動教室の送り迎えとか、

伊東 そそう。お父さんの昇進祝いってのもあった。

有馬 家の行事、多すぎたよね？

漆原 割といい家の子だつたよね。転校してきたときも、なんかこう、「来た、美人転校生」って感じだつたし。

伊東 勉強もできだし、いつも楽しそうで。

有馬 うん。

漆原 だから余計、梅檀賞の、

伊東 「鋼の雨のごとく」

漆原 うん、義理の親から虐待受けてる女子高生の話・・・すぐかつた。こんな書けるんだ、さすが江崎、天才、ってね。
伊東 そうそう、ふるえた訳ですよ、私の情緒がね。

漆原 飲んで飲んで。

有馬 ···

少し間

伊東 なんで、死んじやつたんだろ。

有馬、原稿を見ている。

漆原 で、それ、どうしたの、有馬。

伊東 あーごめん、私一人で語っちゃって、

有馬 ああ、うん、

伊東 お恥ずかしい。

漆原 まあまあ。

有馬 これね・・・女子高の文芸部の女の子たちの話。みんな普通に元気で、普通に毎日が流れ、何も起こらない。

伊東
・
・
・
・
・
・
・
絶筆？

有馬 それもたぶんなんだけど。・・・江崎兩音の知り合いのものですつていう男の人から郵送で。「そちらにあるのがいちばんいいと思いま
す。突然ですみません。迷惑でしたら燃やしてください。」って書いてあつた。

伊東 紙で？データじやなく？

有馬 うん。紙で。

伊東 出版して欲しい、とかじやないんだ。

有馬 うん・・でも。

漆原 なんで有馬なのかな？

有馬 江崎ね、よく、屋上にいたの、昼休み。私もよく屋上でご飯食べてたから。私がお弁当持つてくと、いつも江崎が先に來てた。雨で
も寒い日でも、いつつも。

伊東
・
・
・

漆原 そか、ありちゃんと江崎のクラスだけ4階だつたつけ？

有馬 うん・・・それもそうなんだけど。

一瞬間

有馬 あの、
漆原 うん。
有馬 この間、「はせくら」に行つたら岡平先生が来てて。ちょうど、江崎のお墓参りの帰りだつて。金子先生もいて。

伊東 そつか・・・今くらいだったか。

有馬 江崎の話になつて。

伊東・漆原 うん。

有馬 この原稿のこともあつたから。そしたら金子先生が、

伊東・有馬 ・・・

有馬 家庭の問題があつて、親せきの家に引き取られた子でしょ、つて。

伊東・有馬 ・・・

有馬 引き取られた親せきの家の扱いにも問題が多かつたつて。

伊東 え、なにそれ？

漆原 江崎の話だよね？

有馬 私も、「江崎雨音ですよ、作家になつた。誰かと間違えてませんか？」って言つたの。そしたら

伊東・漆原 ・・・

有馬 間違える訳ない、つて。「ちょうど産休入る前で、最後まで面倒見てあげられなかつたこと、今でも胸が痛む」つて。

伊東 そんな

有馬 「せつかく作家になつたのに、自殺するなんてね。身体の傷は治つても、心の傷は治らないのね。辛かつたでしょ、みんなも。」つて。

そしたら岡平先生が、

漆原 ちょ待つて待つて。今の話のどこに岡ちゃん先生登場？

有馬 隠してたんだつて岡平先生の指示で。岡平先生、学年主任だつたから、先生の判断で生徒、私たちには。江崎が・・・隠したがつてたから、

伊東 (遮つて) え、ちょ、ちょ、ちょっと待つて。なに、その、えつと、からだの傷つて。

漆原

あ、

有馬 江崎ね、小さい頃からの虐待で、身体中痣だらけだつたんだって。だから水泳しなくていいように、金子先生たちが、
漆原 水が苦手で、日焼けが嫌いって、

伊東 ちょっと待つて、

有馬 お昼もね、食べてなかつたんだと思う。だからいつも私より早く・・・屋上に居た。
伊東 ちょっと待つて。じやあ、じやあ、あの梅檀賞の「鋼の雨のごとく」、虐待されてる女子高生つて、
漆原 ・・・江崎、

有馬（独白） 江崎雨音は、いつも、屋上のフェンスに寄り掛かって、後ろ姿で、私を待っていた。校舎の屋上へあがる階段は、最後のが7段しかなくて、光が差すと西洋の教会の扉のように見えた。重い鉄の扉を開けると、雨音は、振り向いて笑った。

教室や部室での雨音は、怒つたりイラついたりしなかつた。静かで、きれいで、朗らかだった。私は、屋上の雨音が好きだった。

「死んでもいいかなあ」が口癖の、江崎雨音が。

「だめに決まつてるでしょ」私はいつも、死んではいけない理由を、雨音に語つた。誰かに迷惑がかかる、とか、もうすぐテストだから、とか、みんな雨音が好きなんだよ、とか。理由は何でもよかつた。雨音はその度に「そつか、じやあそうする」と言つて笑つた。陽のさす日は光の中で、雨の日は扉の中の7段の階段で、益体もない、死んではいけない理由を、私たちは数えた。18歳だった。

漆原

雨、

有馬
あ、雨音止んだね。

うそ、こつちまだ降ってるよ・・・ああでも少し弱まつたかも。そ
ういえばそつち、水、大丈夫?

伊東
漆原
今年は割といい感じで、

有馬
雨降ってるよね。多からず少なからず。

漆原
うん。ダムの貯水量そんな低くない。

伊東
漆原
そつか。よかつた。水不足はねえ・・・

江崎は喜んでたけどね。水不足で水泳なくなつて。

伊東
有馬
そうだっけ。

伊東
有馬
そう。

漆原
暑かつたよねえ。あの年も。

漆原
うん。

漆原
「大地を潤し、草木を育てる。慈しみの雨だ。」

漆原
・・・

伊東
漆原
・・・なに急に。

伊東
漆原
や、よく岡ちゃん先生が言つてたな、つて。

伊東
漆原
ああ、言つてた。

伊東
漆原
・・・言つてたね。

伊東
漆原
大地を潤し、草木を育てる・・・何だっけ、この時期に降る雨の名前、
慈雨。

漆原 それだ。

有馬 ああ。

伊東 「先生はいつも、君たちにとつて「慈雨」でありたいと思っていた、君たちも、
有馬 いつかどこかで、

有馬・伊東・漆原 誰かの慈雨であれかし、と願つている。」

伊東 言つてた言つてた。

漆原 言つてたね。

有馬 ・・・言つてた。

少し間

伊東 ・・・明日には止むんじやない? 雨。

有馬 うん。

伊東 ありちゃん。それ、私に送つてくれない?

有馬 うん、分かつた。

伊東 読んだら、うるに回す。

漆原 待つてる。あー、できたらデータにしてほしいな。

伊東 ・・・まあ、やつてみる。

漆原 泣くなよ。

伊東 泣くわ、こんなん。

有馬 普通の、高校生の話だよ。ほんと、何にも起こらない。泣いたり笑つたり喧嘩したり仲直りしたり。

伊東・漆原

・・・

有馬 クリームパン食べたり文芸誌つくつたり疑つたり嫉妬したり信じたり選んだり。江崎は、
漆原 こつちが本当。

有馬

・・・

伊東 やめろー。どんだけ私の情緒攻撃してくるのよ、江崎ーー。腹立つー。

漆原
有馬
江崎だもんね。

伊東
漆原
江崎ーー。

伊東
漆原
江崎ーー。

伊東
漆原
江崎ーー。

伊東
漆原
江崎ーー。

・・・ ちょ、雨ひどくなつてない?

有馬
雨も降らないと。

伊東
漆原
うん。じや、

伊東 あ、私明日出張で朝早いんだつた。

有馬
え、

漆原
じやまた。

伊東
有馬
また。
漆原
お休み。

三人、ログアウト。

部屋の外では、まだ雨が降っている。細く細く。

雨音がいつか学校の放課後の騒音となり、よくある、授業終りのチャイムが鳴る。

おしまい